

セダン湖の畔に

(一九七三年九月十四日、金)

前夜には、フィレンツェから二〇時半の夜行に乗り、今朝方にはスイス国内の何処かで下車してみようかとの目算ではあったのだが、ロ、ロ、ロ、目覚め気付いた時には、列車は既に、国境を大きく越えて、フランス北部を西方へと向かって走っていた。

地図上での現在地を確認しながら、ふと、停車した駅ホームの表示板を見る。Metz とあった。

さらに、進行方向の次には Sedan とこの駅名が目についた。

その言葉は、七月下旬から八月下旬にかけての、イギリス・ウィズビーチキャンプ場での二週間を共に過ごしていた時のマリリーの住所は確か Sedan だったな……と思い浮かんだ。

フランスに来る機会があったら、どうせ、お立ち寄りいただくことこのメッセージもあつたな……。挨拶言葉の常套句ではある訳だし、突然に予告なしの訪問では不都合な場合もあるだろうがこの躊躇と多少の迷いはあつたのだが、事前での連絡手段がないのは致し方ない。

それにより降りなかつたとしたら、生涯、逢える様な機会があるものでもないだろう。今からスイス方面に引き返すには少々、時間を浪費してしまつた様だし、序のついでなので、ちよつとだけ顔を出してみるか、と云つていってしまった。

セダンの駅は人通りも少なく、静かな佇まいだった。

駅前のロータリーからは前方、左右へと四本の道路が放射状に出ており、掲示板の地域案内図を参考にした見当では、駅を直して真っすぐに伸びているメインストリート、フィリポーター通り沿いの進行方向右手側に位置するところが直ぐに判り易かった。

川に架かる橋を渡り、道路の両側には小規模な商店やアパートなどが並び、続いていた。

凡そ一〇分程度を歩いたのだろうか。彼女の自宅アパートには容易に辿り着くことが出来た。アパートの階段を上がったの二階だった。

「こんにちは、アリアをここに置いておいて、アリアを開けてくれた。

「あ、うら、うら、うら。」

予告なしの突然の訪問ではあつたので、瞬間、ビックリした様子ではあつたが、目を丸くしながら「突然で、いいね、なさい。」列車が丁度通り掛かった際に思い出したので、居るのかなと聞いて、降ひてみたぞ。

「突然で、いいね、なさい。」列車が丁度通り掛かった際に思い出したので、居るのかなと聞いて、降ひてみたぞ。

「突然で、いいね、なさい。」列車が丁度通り掛かった際に思い出したので、居るのかなと聞いて、降ひてみたぞ。

「せっつかく立ち寄って戴いたのに、本当にごめんなさいね。実は、今日から学校が始まるので、今から登校しなければならぬの。ちょっと、待っていてね」

その間にはお父さんへの紹介があり、一緒に写真を撮った後には数分間の待ち時間ではあったが、直ぐに、彼女は出て来た。

そして、一人で十数分くらいは歩いただろうか、赤レンガ色の学校の校門前に到着した。

校門の内外では久しぶりに顔を合わせた友人たちが歓迎して、新学期の始業式の口らしい雰囲気満ちていた。

殆どが地元の生徒学生たちの様であり、私の様な東洋人らしき風貌の人物などは皆目、見当たらないので、チラチラッとしたあちこちからの視線は感じたものだった。

そして、この場で紹介されたのが彼女の友人、ブリジットだった。

多分、自宅を出る際の直前に電話での連絡でも入れておいたのだろうか。

当人たちに確認はしてなかったことだが、ブリジットがこの夏に卒業して、九月からの就職になると云うことは、多分、マリーは一学年の後輩なのだろうかと云うのは私の勝手な想像ではあった。

フランス語の会話は解しないが、マリーからブリジットへは、イギリスのキャンプ場で過ごした時の話を説明しながら引き継いでいっている様子だった。

「ブリジットです。初めまして。お会い出来て嬉しいです」

「あー サトルです。僕もお会い出来て嬉しいです。日本から来ました」

「今日は私が案内しますからどうぞ」

「それは、嬉しいなあ。宜しくお願いします」

ややウェーブのかかったフィンカラーの髪が肩下までのセミ・ロングで細身な美少女ブリジットとの思い掛けない出逢いの機会だった。

平均的な日本人女性の一八歳よりは幾分、大人っぽい雰囲気にも見えるが、私に右手を差し出しながら、おもてなしの笑顔を手ツツとくれた際には、ハキッとする様な可愛いらしさがあつた。

(マリーも随分、気前がイイんだなあ。こんな素敵な子を紹介してくれるなんて…。多分、自分には恋人がいるだろうな…)と、頭の中では、若干の勝手な妄想が過ぎっていたものだった。



引継ぎを受けてからの彼女は、私の手を握り、グイグイ引きながら、町のあちこちへと歩き回り、案内してくれた。微妙な温度差のある手のひらの感触が何とも心地良い。お互いに楽しさ一杯の笑顔に溢れていた。

町では、丁度、フェスティバルが開催されているから、そこにも行ってみたいよ、と、その会場にも足を運び、案内してくれた。

日本でも小規模都市や町などで開催されることのある、ふるさと産業まつり、とでも云った様な処だろうか。そんな雰囲気の会場だった。

そして、何と、会場では、イセキヤクボタ、ヤンマーと云った日本の有名農機具メーカーの耕運機などの展示販売会が催されていたのだ。

こんな所今までメイド・イン・ジャパンの進出が……と、内心、驚いたものだった。

フェスティバルの会場を一通り巡り歩いた後には、他にも、二箇所を経由しながら、郊外の風光明媚な湖の畔に辿り着いた。

数隻の小型ヨットと手漕ぎボートの係留があり、沖合では一人の若者が水泳を楽しんでいる姿が見えるが、それ以外には人影も見当たらない様だ。

まるで、私達の到着を待ち続けていてくれた予約席の様な湖畔のベンチがあり、そこに二人で腰を下ろす。

湖を超えた遠方のかたには、余り高度の高くない山々が横に連なり霞んで見える。

絵心と持て余すだけの時間の余裕でもあれば、スケッチなど嗜めてみたくなる様な光景でもある。

余り日差しは強くない中で、時折、耳元にそっと触れて過ぎ行く柔らかな風には初秋の訪れを告げられている様にも感じられた。

目の前に広がる、のどかな風景を見渡しながら、色々な話にも花が咲く。

「うん、ハイギリスでのキャンプはどうでしたっ？」

「うん、楽しかったよ。全体で四十人くらいは居たのかな。だけど、女性が三分の一くらいで少なかったからねえ。月曜と金曜夜のダンスパーティーの時には大変だったよ。女の子の引張りがみたいになっちゃったよ……」。

「オッ!! それは楽しそうだね。私も行きたかったなあ……」

「ハハハ。君も参加したら、そりゃあ、モテモテで大変だったよ」

「私には五人の妹たちが居るのよ。今月からの高校生と中学生がいて、小学四年生の二人は双子なの。そっ、一番上にはまだ二歳の子がいるわ。私は今月から地元の郵便局で働くの。」

「へっ。お父さんとお母さんも随分、頑張られたんだねえ。(笑) お仕事とかは何をさせているのかな？」

「お父さんは中学校で英語の先生。お母さんは小学校の先生をしてるわ」

「そりゃあ、まだ、下が二歳までの子供たち六人を抱えていたら、お父さん、お母さんも、忙しいというか、大変だったろうねえ。だけど、今月からは、君が働くから幾らかは楽になるだろっつわね」

「サトルは、いいわね。」「うっ、のんびり一人旅とかが出来て……」

「エッ?! ウーッ、まあ……。時間は作るうと思えば作れる」ただけで、お金の方は、殆ど無いから、極貧の無銭旅行みたいなものだけだね……。😓 だけど、団体ツアーでの旅行だったら、決められたコースを決められた時間通りに周るだけだから、『は〜い、こ』では三十分間、自由に見学して来てくださ〜い。何時何分までにはバスに戻ってくださ〜い』と言われるままでの流れだよな。そういう旅行も、親しい友人や仲間と一緒に参加するのは楽しいだろうけど、こ〜うこ〜うローカルな所とか予定コース以外の場所に立ち寄ったりすることは出来ないよね。一人だったら自由だから、何処にでも行ける。それに、行く先々では色々な人々との出逢いの機会があったり、こ〜うこ〜うして、気に入った所では、ゆっくりした時間を過ごしたりも出来る。それが、僕にとっては旅の醍醐味だし、一番、思い出にも残ることなんだよね」

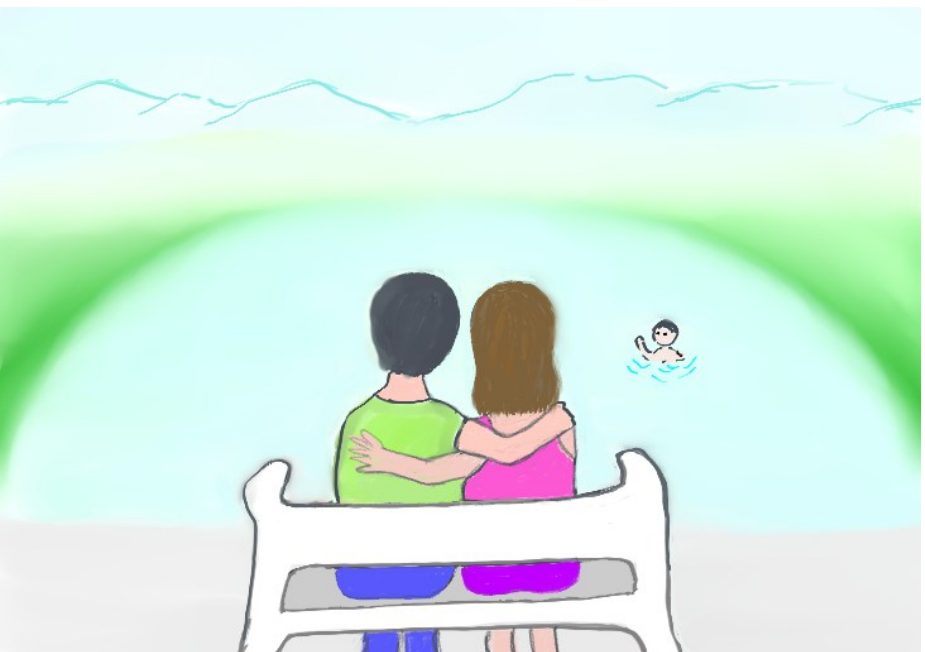
「そっつわねえ。羨ましいわ。叶うことならば、私もそんな旅行がしてみたいよ。」

「それと、素晴らしい風景に出会った時には勿論、それは、それでの感動があるけれど、旅先での一期一会の人との出逢いがあればドラマが生まれることもあるかも知れない。どんなに美しい風景を一人で眺めた処で、人との出逢いが無かったらドラマは生まれないよね(笑)」

「う〜ん。それはそっつだよな〜。それで、イ・チ・ク……イ・チ・エって云うのは……」
「古い言葉だけど、人生上での『一生に一度の大切な出逢い』と云う意味だよ」

「ぶ〜ん……。何か難しそうだけど、素敵な言葉なのね。それに、あなたの云うこ〜うこ〜うって面白いわ。そんな旅には憧れるなあ。」

「うーっ、今日はこ〜うこ〜う君との初めての出逢いがあったけど、こ〜うした人との出逢いと云うものはお互いの人生の上でも奇跡的な出来事なんだよね。例えば、僕が今朝の列車の中で目覚めて、ふと、駅のホームから動き出さずこ〜うこ〜うしていた車窓から外を眺めた時に、ホームの案内板には、次の



「アハハ、‘‘コンコウ’’と云うのは、男性も女性も一緒に入れる共同浴場のこと。‘‘ロテンブロ’’と云うのは屋根がなくて、空や外の景色が見渡せる様なお風呂のことだよ👉 日本人は温泉や露天風呂が大好きだからね。露天風呂の温泉なら全国の何処にでもあるよ」

「フゥォ!!! 楽しそっだわねえ。日本の温泉っ」

っはっはは静かに時が流れていたようだ。

否、流れていたのか、それとも停まっていたのかは良く解らないのだが、彼女による甘美なフリス式おもてなしモードの中では、いつしか、なかなかのイイ雰囲気にはなっていたものだった。只、そんな中での途中ではあったが、左手の方から、やや重そうな足取りでゆっくりとこちらの方へ近づいて来るお婆さんの姿があった。

お婆が目の前至近距離を左から右へと過ぎる瞬間、私は思わず、とっさに少し身を引いて体を起こした時に、「エッ」という様な微妙な表情がフリジットには浮かんだが、私自身においては人生未体験ゾーンの境地なのであり、瞬間の反射的な反応だった様なものだろう。

ともあれ、おもてなしのモードは直ぐに復活再開となり、互いの視界の中から再び、再び、全てのモノは消失していた様だった。

時間の経過と云う感覚もおそろしくはぐれていたのであるが喪失していたのかも知れないだろう。未熟な私においては、なかなか真似の出来る処ではないのだが、流石、フランス女性のムード作りと云うのは、ほんのちょっとした手の上も感じさせるようなものだ。雲の上を歩いている様な境地だったのだろう。

ふと、顔を上げた時「わ」言がめした。

「サア…」

「…何〜」

「あなたも、泳ぎたいんだろ〜」

沖合の泳ぎたいの若者を眺めながら、ふと、私に振ってきました。

「オヘーキを踏む。オヘーキを踏む。」

そうして、あの取りの間に、沖合の泳ぎたい若者が水から上がら、ちぢらに更衣所へ近づき、お婆さんが近づいて来た。

「水着なら、彼が、せうし一枚持たせてくれるかとは感じたのだが、通り掛かり際への彼女との、ふと、ふと、ふと、私に振ってきました。

「水着なら、彼が、せうし一枚持たせてくれるかとは感じたのだが、通り掛かり際への彼女との、ふと、ふと、ふと、私に振ってきました。」

「…私を泳がせたのだから、私を泳がせたのだから…」

確かに、沖合で泳いでいる若者を眺めながらでは、「気持ち良さそうだなあ」とは思っていたものの、余りに予定外かつ想定外のことではあった。

まさか、こんな所まで来て、ましてや、他人様の禪で相撲を取る、様なマネなどは……との躊躇いもややあつた。

見渡しては、何となく遠浅の様でもあり、水温も余り冷たくはなさそうだが、只、遠方、奥の方では左右何れか方向に広がっている様でもあり、湖全体の奥行き、広さというのは良くは判らない。

何れにしろ、ちよつとした、着替え所の様な小さな小屋があり、先客も居たのだから遊泳禁止の場所という訳ではないのだろう。

何より、地元、ブリジットの案内でもあり、私に勧めてもいるのだから。

彼女からの熱心なそのかしには乗せられてしまい、しばしの水浴で遊んでみることにした。

遊泳中での、ベンチのブリジットはというと、時折、私の方に手を振り、笑顔を送りながらも楽しそうな様子だった。

それにしても、こんな所まで来て、泳いで遊んだ日本人と云うのは、おそらくは歴史上でも私が初のことだろうな……。しかも、見ず知らずの他人様のパンツを拝借してまでとは思い及ばない処ではあつた。

そんな妄想が一瞬、過ぎたりもしたが、旅の汗が流せたようで、あとにはスッキリ爽やかな気持ちになれたものだった。

まんざら、人の話に乗せられるのも、たまには悪くないのかな、と。



人生上での貴重な思い出のワン・シーンにはなったものだった。

湖で遊んだ後の、夕方には自宅に案内してくれた。

家に着くと、突然の東洋人の来客は、家族にとっても、想定外のことなので、一瞬の驚きの様な空気感があったものの、彼女から両親と妹たちへの紹介を経た後には、直ぐに和やかな、おもてなしの雰囲気になり、皆さんには受け入れられ、歓迎されたものだった。

彼女からは、「両親と、五人の妹たちの一人づつを紹介された。

五人の妹たちは、この九月から高校生のエーコと、中学生になるフランシーヌ、小学四年生になる双子姉妹のエブリンとジャスリン、その下には、まだ二歳のアレクまでだった。

家族を一通り紹介された後には、改めての、ブリジットからフランス式の歓迎の挨拶を受けた。

当時には、まだ、フランス式の挨拶と云うのは体験したことも、見たことも無かったので、頬を左右交互に私の顔に近づけてきたところでは、両の頬に軽くキスをするものと思いき、そうしたらころ、妹たちは、キャッ、キャと大きな笑い声を上げての大盛り上がりだった。

一気に、場の雰囲気は、和やかで、かつ賑やかなものになったものだった。

その後には、妹たちや「両親とも軽いハグでの挨拶を交わす。

家族とのやり取りでは、中学校での英語教師をされているお父さんとの会話が大半だった。

先刻に足を運んだ町のフェスティバル会場では、日本の農機具メーカーの耕運機などの展示販売会が催されていたのには驚いたという話をする。両親を左右に小さく広げてのジェスチャーを交えながら、

「じゃあ、まあ、何でもかんでも、今は日本の製品が溢れているよ。テレビ、オーディオ、カメラ、車……」。

ため息交じりの様にも受け取れた。

「もうなごみますか」

「それにしても、日本人の旅行者といったら、大抵は団体のツアー客がほとんどだけれど、君みたいに一人でも、こんなローカルな田舎町までの旅行者と云うのは珍しいよねえ。初めて見かけたよ」

「まあ、まあ、気の回へおめでとう、自由な旅が好きですわ」

「将来は何になりたいのかな？ ティレクター？」

「いえ……。まだ、ハッキリしたつもりではないのですが、取りあえずは、何処かの会社に就職してか、エデュケーションの勉強」

会話の中では、他にも色々な質問があったが、この「ティレクター」の言葉の趣意では漠然とした印象ではあったものの、何となくの直感的には、将来のブリジットにとってはどうなのかな（？）と云うか、私への査定なり、探りを入れられているのかな、と云う気配にも感じた様なも

のだったが、それは、逆の立場であれば当然のことなのかも知れないので自然なことだろう。

「当地、フランスでは物価が高いから生活もなかなか大変だよ。例えば、日本では、バスの運転手とかだったら、給料はどのくらいなのかな？」

と、問われた際には、果たしてどの位なのかの認識は私にもなかったし、想定外の突如な質問でもあったので、適当な感覚での受け答えにはなったのだが…、

「そんなに高いのか。フランスと同じくらいだよー。」と、驚いておられたので、少々、高過ぎる様な返答になってしまったのかも知れない。因みに、その頃での為替相場のレートは概ね、一七〇円代前半位だった様な記憶ではあったが…。

一八歳から二歳までの六人の娘たちを抱えての生活と云うのは、公務員の両親の給料だけでのやりくりと云うのは、フランスではなくとも、案外はないのかも知れないだろうが。

お母さんと妹たちは、お父さんと私のやり取りを只静かに眺めながら、にこやかな様子だった。

「君の髪は綺麗だね」

ふと、お父さんから掛けられた言葉は予期しない内容ではあったが、傍らのお母さんと娘たちの方にも視線を送りながら通訳されると、皆さん頷かれての同調モードではあった。

日本人の場合には、年輪を重ねての白髪交じりにもならない限りは、ほぼ百パーセントが黒髪単色なので、別に、珍しくも何でもないことであり、無論、これ迄の人生上でも髪が綺麗だと褒められたことなどある筈もないことなのだが、湖での水泳の後ではあったので、少々、髪の湿り加減での艶もあったことだろうが。

多く、フランス人の場合には、黒から明るい茶系にかけての混在した様な中間系が多いので、或いは、日本人の様な殆ど混じり気のない、単黒色と云うのが、希少で、或いは、綺麗にも見えたものか、単なる社交辞令なのかは良く解らない。

その云えば、かのフランス俳優のアランドロンも、人気歌手のアダモにしても、濃い黒髪だったなあと、勝手に思い出している様な気がしたものだ。

逆に、日本人からフランス人を見た場合には、色々な髪色のバリエーションがあるのは、それはそれでの魅力でもあり、人には様々な違いと云うものがあるので、人は、自分にはないモノを他人が持っていることと云う所に、或いは、魅力を感じて惹かれる様なものなのかも知れない。

また、それ故に、金髪や茶髪などの明る目の髪色に憧れを感じる日本人と云うのも少なくなないものだろう。

夕食には、お母さん手作りの料理が振舞われて、大変ありがたく美味しく頂いた。

ブリジットを始め、お父さんやお母さん、妹たちにも皆、笑顔が溢れていた。

何と云う、明るくて賑やかで、幸せに溢れた様な家庭だろうと思った。

「お母さんのお料理が
とても美味しいですね。
今日は本当にありがとう
ございました」

この言葉が自然に出た
のだが、お父さんが直ぐ
に、「お母さん」通訳で
伝えられると、「お母さ
んの目線が私と合っ
ても嬉しそうな笑顔
がこぼれてきた。

「それって、このマネー
ズも凄く美味いです
ね」と続けた。

「このマネーズは、お
母さんの手作りなの
よ」とプリントが添え
る。

「へーっ。そうなんですか。それは素晴らしい。これだったら、どんな料理にでも使えます
ね」と会話が続いた。お母さんの表情がさらに、嬉しそうだった。

賑やかで楽しい雰囲気夕食団欒の場も和み、ご家族皆さんから私への歓迎モードが溢れて
いる様に感じられたものだった。

つばこの後、

「レディ・ルー・トゥ・パパー」とプリントからの誘いが有った。

彼女は私の手を強く握り、グイグイ引きながらの急ぎ足で町中の小さなパブへと出掛けた。
瞬間の彼女の優しい眼差しと微笑の残照は、半世紀を超えた今でも、脳裏の奥底深への記憶の
スクリーンには残っていた様でもある。

店内では凡そ、十人近い先客が居た。

概ね、二十代から三十代前後くらい若い若者層が多い様な店だった。
アルコールには弱いのだが、取りあえずは、ビールでの乾杯。🍷

店内では、普段は見かけることのない様な東洋人の私と、それに、プリントとの目立った組
み合わせなので、周りからの珍しげな視線と云うのがあちこちから感じられたのだが、彼女



自身は、一向に気がついていない様子だった。

「明日からは、どちらの方に行くの？」
「えっ？ あぁ……。何処になるだろうね。何の予定も計画もないのだから、東風が吹いたら西の方へ…。西風が吹いたら東の方へかな。(笑) だけど、もうイギリスと北の方は廻って来たから、これからは南の方だろうね。一旦、パリ駅着いて時刻表を見てからでないと判らないけど……。南の方……。イタリアとか、それとも、スペインの方がかな……。風の吹くまま、足の向くままだからね。明日、何処に居るのは僕にも判らないよ(笑)」
「ごいなぁ。そんな自由気ままな旅行が出来るのは……。出来ることなら一緒に付いて行きたいよ。」

「……」

叶いつくならび、帰国便の切符を売り払って、当地でのアルバイトでもしながらの居候で、期間を延長出来ないものだろうか、頭の中での妄想は渦巻いてもいたものの、如何せん、残り時間が余りて無きものなのであり、今更にはどうにもならない処ではある。

翌日の夕方、十八時を過ぎた頃にはブリジットの付き添い見送りやセダンの駅に着いた。

発車時刻迄には、約一時間ぐらいいの十分な余裕をもつての到着だった。

二人で駅ホームのベンチに腰を下ろすと、彼女は前日の楽しそうな雰囲気とは一転しての寂しそうな表情だった。

列車を待つ間には、彼女からのお別れの抱擁とキスが延々と続く中で、私は口、身を任せながら、彼女の温もりと息遣いが静かに伝わってくる。

やがて、十九時過ぎ発のパリ行特急列車がホームに入ってきた。

愈々、何かが込み上げて来る様な思いではあったが、最後の別れを交わしてデッキから列車内へと入った。

窓側の席に座り、窓を押し上げて開



けると、彼女の寂しそうな気配と云うのが空気を伝わってくる様だった。

定刻になり、列車は動き出すと直ぐに加速を増し、車窓からの見えなくなるまで、彼女はホームで手を振っていた。

ベンチで列車を待つ間には、「アائم・ピティ・ナウ」とつぶやいていた彼女の言葉がいつまでも耳奥に残り、「ごだましている様だった。

(九月十五日、土)

前日朝からの二日間と云う短い時間ではあったが、人生での充実した良い思い出のスペースとして残る様なひと時ではあったことだろう。

時刻は既に、二十二時二十分になるので、もうすぐ、多分、あと十数分位ではパリに着くのだらう。

多分、彼女も今は私のことを想像していることだろうか。

「せつそんそんろ、パリに着いただらうか…」とか。

或いは…、

「もう言えば、パリでは何処の予約もしてなせそうだったけど、今夜遅くにパリに着いてからは、一体、何処に泊まるのだらう…。大丈夫なのかな」とか…。

パリ東駅への到着は二十二時半を少し過ぎた頃だった。

到着時刻が余りに遅い時間帯になり、また、その直前から降り出した雨も次第に激しくなってきたので、これでは、雨に濡れずにユースを探して辿り着きようがないとの判断から、二駅程の郊外寄りに引き返して、ローカルな小さな駅構内ベンチでの野宿を考えて移動した。

然しながら、駅構内の室内側では落ち着いて安眠を得られそうな場所も無かったので、仕方なく、屋外ベンチでの野宿とした。

無論、快適な安眠とはいかないのだが、致し方ない。